

女性のエンパワーメント・ストーリー：選択は私たちの手に

ショリハツン・キプティヤ（インドネシア）

エガさん（31歳）は外で働きながら子育てをしています。広報の仕事をしている関係上、様々な場所へ移動しなければならず、時には出張もこなします。女性、母親、妻、社会人と何役もこなさなければならない彼女の生活は、容易なものではありません。数多くの仕事をこなすために限られた時間とエネルギーを割り振りしながら、生活のバランスを保たなければならないのです。

エガさんの大学での専攻はコミュニケーション・広報学で学位も取得したのですが、高校生だった10代の頃にはある趣味に熱中していました。それは、ショッピングモールに行き洋服を買うことです。特に、洋服がどのように作られているかということに常に興味を抱いており、そのプロセスを知りたいと思っていました。そこで、独学で洋裁を学ぶことを決意し、好みの服の型紙づくりから縫製までを何とか自分でこなせるまでになりました。しかし、ファッションスクールに正式に入学してデザイナーになりたいという彼女の希望は、両親には認めてもらえませんでした。そのため、大学でコミュニケーション・広報学を学ぶことにしたのですが、大学に通う間もファッションへの情熱は冷めることがなく、生地を集めたり自分の服をデザインして縫ったりしていました。

その後3歳の女の子を持つ母親となったエガさんですが、娘の服を沢山買う必要が出てきた時に、自分の中で洋裁への情熱が再燃するのを感じました。そこで、自分で作ってみようと思い立ち、忙しいスケジュールをやりくりして、趣味として娘のために自分で子供服のデザインし、手作りするようになりました。そしてこれがきっかけとなって、1歳から5歳までの女の子のためのアパレルラインを立ち上げることを思いつきました。子供服の潜在市場に大きな可能性を見出したのです。こうして、エガさんはオフィスで広報の仕事をする傍ら、自らのアパレルラインのビジネスと母親、妻、娘としての役割を巧みにこなすという試みに挑み始めたのです。

近年、女性には自らの意思で何にでもなることができるという自由な選択肢が与えられています。自分が何に対して情熱を抱いているかによって、人生の選択をするべき時代になったのです。もちろん、その際には周囲の人たちからのサポートが受けられることが大変重要になります。エガさんの場合、緊密な家族の絆や、必要な時にはいつでも夫からのサポートを受けられるといった支援の仕組みがあったからこそ可能だったと言えます。

外で働きながら子育てをするのか、専業主婦として子育てに専念するのか。どちらの選択も正解だと思います。現代では、女性が社会で果たす役割の重要性は増しており、あらゆる分野において女性の活躍が見られるようになりました。下図を見ても分かるように、インドネシアでは初等教育就学率における男女の比率がほぼ等しくなっています。このことから、現在では女性と男性の双方に同様の機会が与えられており、女性が高等教育を受けることに対して周囲から反対を受けることが多かった1950年代ごろまでとは状況が変わっていることが分かります。

概要

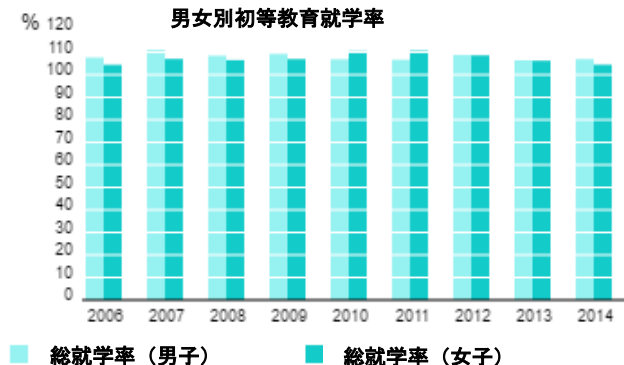
社会経済指標

Total population (in thousands)	257,564
GDP in billions - PPP\$	2,842
GDP per capita - PPP\$	11,035
Adult literacy rate	95.44
Female adult literacy rate	93.82
Youth literacy rate	99.71
Female youth literacy rate	99.73
Government expenditure on education as % of GDP (2014)	3.29
R&D as % of GDP (2013)	0.08,489

出典：国連教育科学文化機関 (UNESCO) 統計研究所

教育

男女別初等教育就学率



出典：国連教育科学文化機関 (UNESCO) 統計研究所

<http://en.unesco.org/countries/indonesia>

インドネシアでは、独立運動の頃から女性のエンパワメントを経験してきました。例えば、チュ・ニャ・ディン、マーサ・クリスティナ・ティヤハフ、R.A. カルティニ、デウィ・サルティカなど、この国の歴史を動かした数多くの女性の英雄が存在します。また、ムスリム女性のイスラム改革組織アイシヤや国内最大のイスラム団体ナフダトゥル・ウラマをはじめとする全国や地方レベルの多くの組織を女性のリーダーが率いており、またそのメンバーたちが多彩な活動に従事していることは、女性のエンパワメントが様々な形で実現可能であることを物語っています。

女性のエンパワメントは単なるセオリーではなく、生活の一部です。私は自分の住んでいる周辺地域で、女性のエンパワメントに関する活動が行われるのをこの目で見てきました。何も手の込んだ大掛かりな活動である必要はなく、単に小規模な地域住民による手づくりのプログラムであっても、女性のエンパワメントを推進する良いきっかけとなり得るのです。

ここで話をエガさんに戻しましょう。エガさんには選択肢がありました。そこから自らが望む選択をすることで、女性としていかにエンパワメントの実現に向けて人生を歩んできたかを私たちに教えてくれました。一歩ずつ前進するごとに、エンパワメントに近づいていったのです。彼女は家庭、職場、社会における役割を立派に果たすことで、女性として人生に起こる様々なことの楽しみ方を示してくれています。複数の役割を気負うことなくさらりとこなしつつ、エンパワメントを体現しているのです。彼女が手に入れたようなエンパワメントを、全ての女性に。

写真：オフィスでの仕事を終え、自分の子供服店で働くエガさん

